私立柊高校の日々。

鮮音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私立柊高校の日々。

【Ｎコード】
Ｎ１８１０Ｌ

【作者名】
鮮音

【あらすじ】
私立柊高校に通う麻原星（あさはら・しょう）。二年に進級したその日、彼に『衝撃』の出会いが…
完全なるギャグ小説になるか、それともギャルゲ小説になるか…。
それは作者のやる気次第？！

第一話～一ノ瀬亜優～（前書き）

真面目な話を書いているうちに、どうにもギャグを書きたくなってしまいました。そして、これを書いているうちに、内容がギャルゲの様になり…

何かスミマセン…（汗）

第一話〜一ノ瀬亜優〜

「んんっ…、くあぁ〜」

朝起きて大きな欠伸をする。上半身を起こし、部屋を見渡す。キッチリと本が並んだ本棚、机の上には昨晩眠い目を擦って仕上げた課題、勿論それ以外の物はしっかりと所定の位置に配置してある。普通の男の部屋よりは清潔感を感じるのも、日頃整理整頓を心掛けているからだ。…まぁ、急に女の子が来ても良いようにって理由だけどね。

ベッドから降り、窓を開け放つ。すると。

「あっ…」小鳥が入ってきた。可愛らしい声で囀り、心が和む。本当に今朝は気持ちが良い。何というか…優雅だ。今までの人生の中で、最も優雅な朝ではないか？と思う。

「…そう言えば、今何時だろ」

きっと時間は相当な余裕がある。これ程までに完璧な朝なのだ。いつもより数十分早く起きて…

「……」

いつも僕が起きる時間は午前七時半。そして出発時間が八時。僕が手にした小型の目覚まし時計が指していたのは……八時十分。

しばしの思考停止。たっぷり三十秒、僕は時計とにらめっこ。そして叫んだ。

「全然優雅じゃねぇぇっ！！」

◇◆◇

おそばせながら自己紹介。

僕の名前は麻原星（あさはら・しょう）。近所の私立高校に通う、いたって普通の男子。特徴が無いのが特徴という…、いや、確か友達の女子に、「アンタって童顔だよね」とか言われたっけ。

まぁ、その他に一つ以外は特に取り上げるべき物はない。

「ホームルームが八時半っ、ギリギリ間に合うかっ？！」

そんな僕は今、全力で走ってる。見事な寝坊をかまし、普段あるはずの余裕が全てぶっ飛んだ（むしろマイナス）。

勿論母さんに抗議した。すると母さんは親指をグッと立てて…。

「大丈夫！アタシもさっき起きたばかりだから！」

そんな事を満面の笑みで言ってのけた。我が母ながら、あの能天気さには呆れて物も言えない。

チラリと腕時計に視線を落とす。針が指し示す時刻は八時二十分。ヤバい、体育の持久走で、始まってすぐにトイレに行きたくなってしまうぐらいヤバい。

「不味いっ、進級初日に遅刻は不味いって！」

実は、今日から僕はピカピカの二年生。もし遅刻なんかしたら、新しい担任にマークされるかもしれない。それだけは絶対に避けたい！

だが、そんな事を考えている最中、僕の脳裏にはもう一つの想像が膨らんだ。

◇◆◇

「ヤバい！遅刻だっ！」

僕は通い慣れた通学路をひたすらに走る。一刻の猶予もない、まさに絶体絶命？！

僕の通学路には、途中十字路がある。普段はそこで友人と合流するのだが、今はもう居ない。当たり前だ。

「あぁぁぁ～っ？！遅れるーっ！遅刻遅刻遅刻ーっ？！」

ふいに耳に届いた女の子の声。十字路の右側から飛び出した女の子と、僕はぶつかった。「きゃっ？！」と、か細い悲鳴を上げて尻餅をつく女の子。制服を見た感じ、うちの生徒だろうか。しかし、見た事のない顔だ。…しかも可愛い。

「だ、大丈夫？！」

慌てて手を貸す僕。女の子も僕の手を取り立ち上がる。口にくわえていたであろうトーストが、無残にも道路の上に転がっている。

「すっ、すみませんっ！初めてで！道に迷って！遅刻しそうでっ！！」

パタパタと顔の前で手を振りながら必死に説明する女の子。その女の子の言葉を聞いて、僕はピンと来た。

「もしかして、転校生？」

「あっ…、はぃ…」

やはり、それなら道に迷った理由も頷ける。

僕は自然と女の子の手を取った。女の子は驚きながらも離さない。

「早く行かないとホントに遅刻になっちゃうよ！」

「あっ、はいっ！」

そうして僕等は学校へ駆け出した…

◇◆◇

……以上、妄想終了！

僕には恥ずかしい癖が一つある。それは『妄想癖』だ。何かある度に都合の良い事を考えては、その空間に浸る。とある女子に、「ソレだけは治せ」と、凄まじい力を込めて言われた。

「まぁ、そんなギャルゲーみたいな事があるわけ無いよなぁ」

自嘲気味に笑う。速度が落ちた。慌てて速度を上げる。そして、そんな事をしている間に件の十字路が見えてきた。

間もなく十字路に差し掛かるという所で、僕の耳に、こんな女の子の声が聞こえた。

「あぁぁぁぁ〜?!遅刻するーっ!遅刻遅刻遅刻ーっ!!」

思い出すのは、先程まで脳内にて繰り広げられた妄想。期待が膨れ上がる。そして、その溢れる期待を胸に。

僕は十字路へ飛び出した!

ガンッ「ぐほぁっ?!」ドサァーーッ!!

ひかれた、自転車に。

世界の動きがスローモーションに見える。数秒滑空した後、僕は道路に倒れた。

あ、女の子トースト食べてる。

そんなどうでも良いところに目がいった。

数秒の沈黙。唐突に女の子は、あっ、と呟き、学校へ向かって自転車をこいでいった。

十字路に僕一人。幸い、この時間帯は人通りが少ない。

「……二分だけ…」

何故か溢れだした涙を拭いながら、僕は倒れたまま、綺麗な青空を見上げた…

◇◆◇

僕の通う『私立柊(ひいらぎ)高校』は、文武両道を校風に掲げている。有名大学に進学する人も多いし、全国大会に出場する部も多々ある。だけど、学力平均は至って普通。進学希望者が上位で高得点を叩きだし、部活馬鹿が下位でひたすらに平均点を下げる。

要するに、この高校は極端なのだ。しかし、部活動推薦もあるので進学率も高く、親御さんには人気だし、志の高い生徒にも大人気だ。

この学校で僕はどちらにも属さない外れ者。成績は学年内でど真ん中。何かを頑張ろうにも諸々の事情で出来ないし…。一人、僕とは違う意味で外れ者がいるけど、そんな風に出来ればどれ程幸せだろうか。

あれ？いつの間にか暗い話になってる。これ以上は止めとこっと。

「…八時…、っぜぇ…、三十二分…」

説明しているうちに…、ん？何の為の説明かって？それは勿論、読者の皆さんの為でございます。

何はともあれ、自分の教室の前についた。時間を見ても見事に遅刻。この二分はアレの二分だ。

「…なるようになれ、だ」

新クラスの名簿の中に見知った名前があったし、いざとなったらそいつがフォローを入れてくれるだろう…と思う、いや願う。

「すーっ、はーっ…」

深呼吸。この学校は校則が若干緩いが、担任が体育会系だったら通用しない。

「（どうか違いますように…）」

そう祈りながら僕は扉を開いた。そして、開口一番。

「すみませんっ、遅れましたっ！」

声を張ってそう言った。

クラスメイトが僕を見る。そこで僕は気付いた。

「あれ？…先生はまだ？」

教卓には先生が居らず、生徒は好き勝手に歩き回っている。

入る前、僕は緊張で気付かなかったらしい。喧騒に包まれていた教室が静まり返る。そして。

「「あっはははははははっ！！」」

大爆笑が起こった…

◇◆◇

「くうぅ～…、いきなり恥ずかしぃ…」

顔から火が出る程に恥ずかしい。机に突っ伏し、頭を抱える。しばらくはコレを弄られるだろう。

「ま、良かったじゃん。遅刻になんなくて」

「あ、真菜。おはよ」

右隣から声を掛けられた。

天海真菜（あまみ・まな）。僕の幼なじみで、付き合いは十二年になる。

勝ち気な性格を連想させるつり目。笑ったらチラリと見える八重歯。鼻筋は通り、やや茶色い髪は、後ろでひとくくりにされている。スタイルも悪くなく、世間一般には上位に入る容姿らしいが、幼なじみの僕にはイマイチ分からない。単に、僕の感性が一般からズレている、という可能性もあるのだけど…。

「何でも転校生が来るらしいよ？」

僕の隣の席に、当たり前の様に座る真菜。

「真菜の席はあっちでしょ？」

僕は右斜め前の席を指差す。この学校の最初の席順は、男女別に出席番号順。今回、僕は窓際最交尾だ。ア行で始まる名字がこんなに居るのは奇跡に近い気もするが…。

僕の言葉に、真菜は少し不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「アタシが隣に座るのがそんなに嫌？」

「…何で怒ってるのさ」

「……別に」

…女って分からない。

「…で！転校生の話だけど！」

今さっきの不機嫌さは何処へやら、コロッと表情を変えて真菜は言った。…ますます女って分からない。

「たぶん……女子だよ？」

女子の部分だけ強調し、真菜が言う。

「ふ～ん…」

「……」

「……」

短い沈黙の後、真菜は溜め息を吐いた。肩をわざとらしく竦めている。

「アンタって、本当に色恋興味なし。だよね～」

「え？そんな事無いよ？」

ちょっと心外だ。まぁ、いつかの為に部屋を掃除してるなんて、口が裂けても言えないけど。

「あっそ」

全く信じていない様子の真菜。そして、この話題に飽きたのか、違う話の種を探し、見つけたらしい。

「そういや、今日何で遅刻したの？」

「…遅刻はしてないよ？」

先生が来る前に教室に入ったし、遅刻にはならない…はずだ。

「あー、はいはい。で、何で？」

面倒臭そうに手をひらつかせる真菜。そして理由を話すように、僕

を促した。訂正を受け付けないようなので、僕は簡潔に述べた。

「単純に寝坊。母さんも起こしてくれなかった」

「お母様も大変なんだから、仕方ないじゃん。…アンタにも言えるけどさ…」

「……」

「……」

今度は長い沈黙。今朝はあまり真菜との会話が弾まない。まぁ、こんな日もあるか。

「…アタシ、席戻る」

言って、真菜は自分の席へ戻っていった。沈黙に耐えきれなかったらしい。

真菜が席へ戻ったとほぼ同時に、新担任が入ってきた。ゾロゾロと生徒が席につく。

「…？」

そして何故か、先程まで真菜が座っていた席が空く。

「すまない、遅くなった。今からホームルーム…、と、その前に…」

担任が扉の方へ手招きをする。すると、一人の女生徒が入ってきた。

「えー、転校生を紹介する。…はいっ、自己紹介」

教室が騒めく。女子は品定めをするようにし、男子はだらしなく鼻の下を伸ばしていた。

何故なら、その転校生が余りにも可愛かったからである。

「あのっ、初めましてっ！」

澄んだ声が教室に響く。寸前まで騒がしかった教室が、一気に静まる。…僕の時とは違うな、やっぱり。

転校生はしばし俯いた後、決心したように、勢い良く前を向き、声を張った。

「一ノ瀬亜優（いちのせ・あゆ）ですっ、……宜しくお願いしますっ！」

◇◆◇

一ノ瀬さんは顔を真っ赤にしながら頭を下げた。

スタイルは決して良いとは言えないが、透き通るような白い肌。クリッとした大きな黒い瞳。ややたれ目なのが愛らしい。肩まで伸びた黒髪は艶があり、とても柔らかそうだ。前髪は、不思議な形をした青い髪止めで止められていた。

「あっ！君はさっきの！」

一ノ瀬さんを見て、僕は声を上げた。顔は見ていなかったけど、声はしっかりと耳に残っている。間違いない、十字路の女の子だ。

「あっ…、あぅ…」

一ノ瀬さんも気付いたらしい。呻きながら俯いてしまう。

「おい麻原〜、いきなり転校生を苛めんなよ〜」

一人の男子が、からかうようにそう言った。すると、周囲がそれを真似るように口々に囃し立てる。

「え…、あの…」

完全に遊ばれている。僕は何も言えず、頭の中が真っ白になってしまった。

◇◆◇

……以上、妄想終了

「（こんな風になってたまるか…）」

ただでさえ遅刻入場の一件で恥ずかしい目を見たのだ。これ以上、恥はかきたくない。

パチパチと、一ノ瀬さんは拍手で迎えられる。

「それじゃあ、一ノ瀬は麻原の隣に…」

「はっ、はいっ！」

先生に促され、一ノ瀬さんは小走りでこっちにやってきた。鞄を机に置き、僕の方を向き…固まった。

「……へ？」

クラスの皆も何事かとこちらを見る。一ノ瀬さんは口をパクパクと、魚のように動かしている。

「あの、どうし…」

「ごめんなさいっ！！」

いきなり謝罪された。思い当たる節はあるが、今言うことではないでしょうよ。普通…。

「あ、いやそ…」

落ち着かせようとするが、一ノ瀬さんはこちらの言葉を全然聞いていない。

「決して貴方を見捨てた訳じゃあなくてっ、私、急いでたしっ、ああっ？！それは貴方も同じじゃないですかぁっ！わ、私はなんて事を…」

頭を抱える一ノ瀬さん。抱えたいのはこっちなんだけど…。

弾丸の如く放たれる言葉に、僕が入り込む隙間は一切ない。…てか、クラスの皆も止めてくれよ！何で聞き入ってんだよぉっ！

「あ、あのさ…。お、怒ってないからさ、ホントに…」
僕は暴走する一ノ瀬さんをなだめるように言ったが、一ノ瀬さんはさらに興奮し、力強く首を左右に振った。

「いえっ！それでは私の気が済みません！」

もう手に負えない。僕には無理だ、誰か何とかして…。

誰か、それに該当する人物に視線を送る。その人物、真菜と目が合った。

「（タスケテ…）」

心の声を、最大限表情で表現する。どうにか伝わったらしく、思案顔になる真菜。そして。

「（ガンバッテ）」

笑顔で親指をクイッと上げる。…神様、あそこに幼なじみを見捨てる女がいます。

「…麻原さんっ」

一ノ瀬さんに視線を戻すと、丁度僕を見上げた瞬間だった。くりんとした、大きな瞳に僕が映っているのが見える程に顔が近い。フワッと良い香りがした。

「…な、なんでしょうか」

そう言えば、話を全く聞いていなかった。何やらクラスが騒がしい。担任は本を読みながら時間を潰している。…教師、仕事しろ。

「私の提案に、同意してくれますか？」

…もう、どうにでもなれ。

僕は頷いた。それが明らかな失策だと気付かずに…。

僕を見て、クラスの女子は小声で何かを話し合う。そして、男子からは羨望の眼差し。…一体何が起こってる？

一ノ瀬さんは、僕を見て顔を赤らめた。思わず見とれてしまう。こんなに可愛い女の子が目の前に。それだけで卒倒物だ。

「分かりました。…では、二学期が始まるまで…」

グッと、胸の前で拳を握り僕を見上げる一ノ瀬さん。…嫌な予感しかしない。

一ノ瀬さんは花のような笑顔を作り、言った。

「私がお弁当を作ってきますっ」

…ちょっと待て、どうしてこうなった…

◇◆◇

「いやぁ～、面白い事になったねぇ～」

休み時間、真菜がニヤニヤしながら僕の肩を叩いた。他人事だと思って…。

「あ、初めましてっ」

一ノ瀬さんが真菜に微笑む。真菜も微笑み返した。

「アタシは真菜、天海真菜。ヨロシクね、亜優」

互いに握手をしている。そして何かを話し始める。女子の話にはとてもついていけない。かと言って、僕には真菜以外に話す相手はいないんだけど…。あ、何か涙が出てきた。べ、別に悲しくなんてないんだからねっ！

「はぁ……、ん？」

溜め息を吐いた瞬間。背中に何かが刺さる。痛い、とてつもなく。バッと振り返る。そこにあったのは…

男子の視線。「テメェ、その状況で溜め息吐くんじゃねぇ」、その視線はそう語っていた。総毛立つ。冷や汗が頬を伝い、手も汗ばんでいた。

「ん？どうしたの、星？」

真菜が震える僕を見て声を掛けてきた。一ノ瀬さんも、どうしたのかと心配そうに僕を見る。いや、止めて？今、前後から攻めるのは止めて？

前方からは一ノ瀬さんの視線。勿論、目を合わせられない。女子が苦手な訳ではないけど、いきなりはキツい。妄想は所詮妄想。あんなラブコメ出来る訳がない。…やってみたいという気持ちも少しはあるけど。

対して、後方には男共の嫉妬に満ちた視線。溜め息を吐いた事に怒っているのだろうが、今では一ノ瀬さんと言葉を交わすだけで噛み付いて来そうだ。特に、体育会系の連中には絶対に勝ち目がない。全国区で暴れ回る猛者たちを、僕一人で如何にして相手にしろと言うのか…。

「（どうする…、どうするどうするどうするっ？！）」

僕の脳がパニックに陥るには十分な状況だ。どうするかと思考を巡らせるが、頭は空に近い状態なので、全くを持って意味がない。

「ちょっと、星！」

真菜が言葉を発した時、先程までこの場に居なかった人物がこの空間に割り込んできた。

「お前達、各自清掃場所に移動しろって言った…だろ？」

新担任の山森（やまもり）。通称山先だ。眼鏡を掛けた、頼りない細い線の男性だが、不思議と誰も逆らえない。正確に言えば、逆らう気が起きないのだ。何かこう…、苛めてはいけないオーラが…。

今の言葉も、最後が何故か疑問形だし、何よりも腰が引けている。尻を後ろに突き出し、いつでも逃げ出せるような体勢だ。何ともみっともない。

「あ、始業式の日って、先に清掃でしたよねっ！すみません、すぐに行きますっ！」

こんな頼りない教師でも、今の言葉は僕にとって救いだ。とにかく、これでこの地獄から解放される。ありがとう山先。この感謝は、今日一日一杯は忘れませんっ！

「えっと、僕の清掃場所は……？！」

掲示されている分担表を見て、僕は石のように固まった。これは、絶対に決定打になる。

清掃六班、麻原・一ノ瀬。
清掃場所、化学準備室。
清掃班・六班。

「……」

意識が遠退く。これはつまり…

一ノ瀬さんと二人きり

僕の背後に居た男子衆が、いつの間にか僕を囲み、全員が分担表を見ていた。

一人、僕の肩に手を乗せる男子が居た。確か、柔道部の野村くん。
黒帯で段位は三段だっけ…。
野村くんは、この上ない程に優しい声で僕に告げた。
「まぁ、短い余生を楽しんでこいや…」
あぁ、死の宣告ってやつですね。
「嫌だよ…、まだ…死にたくないよ…」

◇◆◇

化学準備室は狭く、薬品などがある。よって床を軽く掃くだけで掃除は終了。やる必要というより、「薬品があるなら生徒にやらせるな」、それが僕の意見。
まぁ、楽だから生徒からの人気は高いんだけど…
「麻原さん、どうしました？」
今の僕にとっては、嬉しくも何ともない。狭い空間、可愛い転校生て二人きり。普通なら泣いて喜ぶんだろうけど、僕にとってこれは私刑への執行猶予だ。
「麻原さ～ん？」
何とかして切り抜けねば。とりあえず、教室には一ノ瀬さんに先に入ってもらって…

「あ・さ・は・ら・さんっ！！」

「ふぎゃあっ？！」

一ノ瀬さんが、僕の耳元で叫んだ。み、耳が痛い。頭かフラフラする…。

「ど、どうしたの？一ノ瀬さん…」

「何度も声を掛けたのに、無視なんて酷いですっ」

考え込んで、声を掛けられたのに気付いてなかったらしい。

「ご、ごめん…」

素直に謝罪する。

「い、いえ。わ、私も…大声出してすみません…」

あれ？何か一ノ瀬さんの顔が赤い。……何で？

「あ、あの…」

顔を赤らめながら口籠もる一ノ瀬さん。少しの間を置いた後、こう聞いてきた。

「あの、明日のお弁当は何が良いですか…？」

「え？…あれ本気なの？」

勢いで言ったと思っていた。いや、願っていた。
僕は一ノ瀬さんから視線を逸らしていた。そう言った後に一ノ瀬さんを見ると。
「え…、ダメ…なんですかぁ…」
瞳に涙をためていた。それが今にも零れ落ちそうで、慌てて僕は弁明した。
「いやっ！ダメじゃない！ダメじゃないよっ？！」
何とか泣かれずに済んだ。もし彼女に泣かれたら、私刑から死刑へと移行するところだった。…危ない危ない。
「…でも」
ふと気付いたが、この状況は色々と相談や質問をするのに丁度良いかも。男子衆に、一ノ瀬さんから何か言ってもらえば解決出来るかも知れないし。…あ、希望の光が差し込んできた。
「何でお弁当なの？」
まずはこちらの疑問をぶつけてみる。何となく返ってくる言葉は分かってるけどさ…。
「それは勿論、今朝のお詫びですっ」
予想通りの返答。

「いきなり通い妻みたいな真似は出来ませんから…」
…今、追加で何か言いましたよ？この子。『通い妻』ってどういう事？…何？将来的には家に攻め込んで来るつもりですか？
「一ノ瀬さん、…今なんて？」
「？…何も言ってませんよ？」
不思議そうな顔をする一ノ瀬さん。何を言われているのか分からない、そんな表情。…僕の妄想であると願おう。
「…出来れば、他の男子に説明してくれたら嬉しいんだけど…」
一ノ瀬さんに「他意はない」と言われれば、男子もある程度は鎮静化するだろう。僕が言ったら、何もかもが逆効果のような気がするし。溜め息の事を謝罪するのはその後だ。
「あ、男子の皆さんに説明すれば良いんですね？」
両手を胸の前でグッと握り、うんうんと頷く一ノ瀬さん。理解してくれたらしい。
「んじゃ、この話はコレで終わりで」
一応は一件落着…かな？多少不安はあるけど、一ノ瀬さんも決して馬鹿ではないはずだ。柊高校に編入するには、編入試験で高得点を取るか、部活動で相当の成績を残さなくてはいけない。
一ノ瀬さんは見るからに文化系。つまり頭が良いはず。おそらくは大丈夫だ。

「そういや、一ノ瀬さんってどうしてこの学校に？」

「あれ？ホームルームで言いませんでしたっけ？」

「ごめん、ボーッとしてて…」

まさか妄想してたなんて言えるはずがない。こういう時、自分のこの癖が面倒臭くなる。真菜に言われて治そうとした時もあった。ただ、いくら努力をしても駄目だった。これは樹の根みたいに強固な物の様で、治すには一体どうすれば良いのか分からない。

「…親の仕事ですよ。それで先週、ここに引っ越して来ました」

今更ながら、読者の皆さんに僕の住む街について説明しようと思う。ここはA県にある朝霧（あさぎり）市という所だ。夏は暑すぎず、冬は寒すぎず、一年を通して住みやすい地域だ。北方には山脈、南方には海。その季節に準じたレジャーを楽しむ事が出来る。

「先週？」

「はい。でも、まだ街の地理は分からないですね」

「まぁ、割に広いからね」

この朝霧市は結構広い。初めて来た人は道が分からず迷う人が大半だ。一週間やそこらで覚えられないし、引っ越しの手伝いもあっただろうから、余計に分からないはずだ。

「引っ越しってやっぱり大変？手伝いとか…」

「いえ、私のは他の人が全部やってくれたから…」

「…他の人？」

さらっと何か言ったよ一ノ瀬さん。

「もしかして、一ノ瀬さんの家ってお金持ち？」

自分でも思うが、とても馬鹿な質問の仕方だったと思う。

「いえ、そんなんじゃないですよ？」

苦笑しながら頬を掻く一ノ瀬さん。恥ずかしそうに笑うその姿が可愛いくて、直視出来ない。

「あっ！」

いきなり、一ノ瀬さんが時計を指差した。時計を見ると清掃時間の終わりを告げようとしていた。

「私たち、全然掃除してません…」

申し訳なさそうに俯く一ノ瀬さん。学校の掃除だけで罪悪感を感じるのは、人が良い証拠だと思う。

「大丈夫だよ。掃除を真面目にやる人なんてそうは居ないから…」

余りに一ノ瀬さんが凹んでいるのでフォローを入れておく。

「…そうなんですか？」

…あれ？思っていた反応と違う。僕の想像では…

◇◆◇

「大丈夫だよ。掃除を真面目にやる人なんてそうは居ないから…」

「あっ、はいっ！そうですね！」

一ノ瀬さんは笑顔を取り戻しましたとさ。

◇◆◇

…という予定だったんだけど…。

「あの、皆さんそういう物なんですか？」

何故か本気の質問モードだ。ズイズイと僕に詰め寄り、好奇心に満ちた瞳を向けてくる。近い近い！顔が近いっ？！

キーンコーンカーンコーン

「あ、清掃時間終わったよ？一ノ瀬さん」

よく格闘技で『ゴングに救われた』と言うが、僕の場合は『チャイムに救われた』と言える。擬似的だが格闘家の気持ちが分かった。

「ホントですねっ、戻りましょうっ」

早く慣れないと、清掃場所変更まであと一週間もあるんだから…。

◇◆◇

教室の前に立つ。そして、当然のように隣には一ノ瀬さん。僕の手は、おかしい量の汗をかいていた。

「？…どうしたんですか？」

「…」

一ノ瀬さんは気付いていないらしい。教室内から漂う、この『殺気』に…。

「これは…」

想像以上だ。いくら一ノ瀬さんが可愛いからって、この『殺気』は以上だって！何か黒いオーラが隙間から出てるしっ！

「いや、でも…」

ゴクリと唾を飲み込む。緊張のせいか、呼吸が荒くなる。…嫌だよぉ、逝きたくないよぉ…。

それでもっ！行かなきゃいけないっ！！

逃げたい気持ちを振り切り、僕は扉を開いた…

◇◆◇

「よっ！…楽しんできたかぁあ？」

地の底から這い出てくる悪魔の様な声。…怖すぎるよ、野村くん…。

野村くんは五厘の坊主頭に青筋を浮かべ、鋭い眼光をこちらに向けている。ご丁寧に柔道着を着用。臨戦体勢だ。

僕が教室に入った途端、他の柔道部員が外に出る。多分、他に誰も入ってこないようにしているのだろう。作戦にまで殺気が…。

「お、お～い…。野村ぁ…、ここを開け……てくれぇ～」

山先が来たらしい。細い声が聞こえる。もっと強気になろうよ山先！声、裏返ってるし！！

教室には僕、一ノ瀬さん、そして野村くんの三名。

野村くんがボキィッと、指を鳴らす。思わず「ヒィッ」と、声を上げてしまった。我ながら恥ずかしいし情けないが…、無理だって！怖いってぇっ！！

「あ、あのぉ…野村くん？始業式始まっちゃうし…、ね？」

山先の事は言えないなと思いながら、僅かな希望に賭けて言ってみ

る。案の定、野村くんは。

「オイィイ？今更逃げんのかよぉお？…ああ？」

さらにお怒りになってしまった。こうなったら仕方ない。予定通り、一ノ瀬さんに頼るしかない…。

「い、一ノ瀬さん…」

「あ、はいっ」

僕が小声で言うと、背後に立っていた一ノ瀬さんは、ずいっと前に出た。

「あ、あの…野村……くん？」

「あ、一ノ瀬さん…」

一ノ瀬さんに名前を呼ばれ、野村くんは頬を赤らめた。鼻の下がだらしなく伸び、とても将来を期待される男の顔には見えない。

「確かに…、麻原さんは素敵な男性（ひと）だと思います…」

「は？」

「へ？」

想像もしない切り出しに、僕と野村くんは素っ頓狂な声を上げる。対して一ノ瀬さんは真面目な顔のまま。

「清掃が始まる前、野村くんが麻原に熱い視線を送っていたのは気付いていました。私みたいな転校生が、麻原さんと話していたのが気に入らなかったんですよね？…ごめんなさい」

しおらしく頭を下げる一ノ瀬さん。野村くんは否定しようとするが、一ノ瀬さんは、その隙を与えなかった。

「世の中には、そのような趣向の方も居られると聞いたことがあります。勿論、それを否定しようとは思いません。…ただっ！麻原さんは、そうではないんですっ！野村くんがそうでも、麻原さんは違うんです！」

力強く話す一ノ瀬さん。一体、物事をどのような角度で見ればこのように曲解が出来るのか。彼女の脳内を調べて見たいと思った。

野村くんを見てみると、虚ろな目になり、口を忙しなくパクパクと動かしていた。完全に意識が飛んでいた。

「…もし、それでも麻原さんを諦められないなら…」

ここで、一ノ瀬さんは野村くんの右肩に優しく手を置いた。野村くんは多少だが意識が戻った様で、ぼんやりと一ノ瀬さんの瞳を見ていた。

そんな野村くんに、一ノ瀬さんは柔らかい笑みを浮かべながら、こう言い放った。

「…私が力になります。…良いじゃないですか『ゲイ』でも…」

◇◆◇

ガタンッ！！

乱暴に扉が開かれ、その後ゆっくりと野村くんが出る。他の柔道部員が野村くんを囲み、戦果を尋ねる。質問を浴びせられている間も、野村くんは無言。その異常さを感じ取った部員は、全員が押し黙る。そして…。

「うわあああああああっっ！！」

野村くんは大号泣しながら廊下を駆けていった。

部員は呆然とその場に立ち尽くすが、数秒後、慌てて野村くんを追い掛けていった。

そんな柔道集団を、僕は教室内から見送っていた。一ノ瀬さんは口に手を当て、先程からオロオロしている。開いた扉の端から、山先が顔を覗かせる。

「始業式が始まるから、急いで体育館に移動して…な？」

そう言い残して、すぐに山先は姿を消した。他のクラスメイトは既に移動をした模様。教室には、僕等二人だけが残された。

「わ…私、何か言ってはいけない事を言ってしまったのでしょうか…」

「……」

出会ってからまだ一時間程。その短い時間でも、良く分かった事が一つある。

「ねぇ、一ノ瀬さんって…『天然』？」

「？」

そんな事を本人に聞いて答えられるはずがない。ただ、間違いはないだろう。

「はぁ…」

自然、溜め息が漏れていた。新学期、やってきた転校生は可愛いけど相当な天然。

「麻原さんっ！私たちも早く行きましょうっ」

一ノ瀬さんは駆けていった。

「こりゃ…一年間大変そうだ…」

そしてまた一つ。

僕の口から大きな溜め息が漏れたのであった…

第二話～史条アリス～（前書き）

…何か、コレ書くの楽しくなってきたなぁ（笑）

第二話〜史条アリス〜

「え〜、四月に入り、いよいよ暖かくなってきた訳だが…」

体育館に響き渡る声。全国の学生全員が大嫌いな校長の話。この柊高校もその例に漏れず、皆気だるそうにソレを聞いていた。…が、たった一人、真剣に聞き入る生徒がいた。

「…す、素晴らしいお話ですねっ！麻原さん！」

僕の隣に立つ転校生。一ノ瀬亜優は、校長の話を聞き、何度も何度も頷いていた。

じっと、頭の禿上がった初老の校長に熱い視線を送る一ノ瀬さん。目にうっすらと涙を浮かべ、感動しているのが見て取れる。…一体どこが泣けるのか、僕には見当がつかない。

話し始めて約十分。ようやく校長が壇上から降りた。大半の生徒が溜め息を吐く中、一ノ瀬さんは静かに泣いていた。

「うっく…、ひっく」

「あの…、一ノ瀬さ……ッ！」

ぞくりと、背中に悪寒が走った。あー…、あったなぁ、第一話でもこんな展開。

チラリと振り向くと、予測通りに男子の目。「泣かせてんじゃねぇ」とそれは語っていた。…いや、今回は僕、悪くないよね、ね？読者

の皆さん！

『えー、続いてぇ…、生徒会長のぉ、お話でぇす』

やる気の全く感じない声が響き、生徒会長が壇上に上っていった。

柊高校では、始業式や終業式、そういった節目の式で生徒会長が話す習わしがある。校長の話程ではないものの、中々に長い。体育会系の足腰ならまだしも、文化系や僕みたいな一般人系には相当キツい。

しかし、皆がそう感じるのも昨年の前期までだった。最も、僕は今までと何ら変わらずに苦痛だったりするのだが。

全校生徒の視線が壇上に集まる。ブロンドの長髪を揺らしながら、生徒会長、『二年生』の史条アリス（しじょう・ありす）は生徒に向き直った。

スレンダーな身体。澄んだ輝きを放つ青い瞳、高い鼻。見るものを惹き付ける雰囲気。カリスマ性が滲み出ていると言ってもいい。父は日本人、母はイギリス人。特に、父親の史条雅人（まさと）は、一代で作り上げた大企業、史条グループの会長。その娘であるアリスも、父の血を濃く受け継ぎ、学業では常に学年二位。運動では、水泳で全国準優勝という実力を誇っている。僕にとっては雲の上の存在。

「近年、この学校の学力。次いで部活動の成績は…」

史条アリスは、ハスキーな美声で皆に語る。男子生徒は勿論のこと、女子生徒も憧れの視線を送っている。

「…すごい」

隣の一ノ瀬さんも史条アリスに目が釘づけだ。先程の男子を確認。彼らも同様だった。正直ムカついた。

「ふあぁ…」

左斜め前方より、気の抜けた欠伸が聞こえてきた。幼なじみの真菜だ。真菜も史条アリスの話は退屈なようで、後頭部をバリバリと豪快に掻いている。だが、誰も真菜を見ない。教員まで壇上を見つめている。

冷ややかな視線を真菜に送ってみる。頭を掻いていた手が止まる。そして僕を振り返り、顔を真っ赤にして前を向いてしまった。

長い付き合いなので、真菜の性格は分かってるつもりだし、今更あんなに恥ずかしがる必要も無いと思うんだけど…。

やがて会長の話が終わる。約十五分。それなのに、校長の話には無かった拍手喝采が起こる。そんな中を無表情で降壇する会長。…おぉ、流石クールビューティー。

その後適当に校歌を歌い、始業式は終了した。

「…史条アリス、か…」

教室へ戻る途中、僕はそんな事を呟いていた。まぁ、僕とは一生関

係ないんだから、気にする事もないか…。

◇◆◇

「凄かったですねっ！さっきの人！」

教室に戻り、一ノ瀬さんは鼻息荒くそう言った。僕と真菜は、そんな一ノ瀬さんを落ち着かせるのに一苦労だった。

「あの生徒会長さんって、三年生の方ですよね！…凄かったなぁ」

目をキラキラと輝かせる一ノ瀬さん。どうやら完全に当てられたらしい。まぁ、仕方ないか。あのオーラを見たら普通驚くよね。

「史条アリスは二年生だよ。僕等と同じ」

「え？」

一ノ瀬さんが目を丸くする。常識じゃあ有り得ないしなぁ、確かに…。

「さっき野村くんに聞いたんですけど、史条さんは昨年の後期から生徒会長をやられてるんですよね？」

「うん、一年の時に立候補して当選。多分、今度の選挙も当確だと思うよ？」

…それより、野村くん復活してたんだ。

「ふあぁ、ますます凄いなぁ…」

開いた口が塞がらないとはこの事だろう。一ノ瀬さんはポカンとしている。

「アタシ、アイツのこと嫌い…」

そんな中、真菜がそう悪態を吐いた。一ノ瀬さんが「え？」と、真菜を見る。

「人より勉強も運動も出来るからってスカしちゃってさ！…感じ悪い」

眉間に皺を寄せる真菜。かなり偏見が交ざってるような気がするなぁ。

「ぁぅ…」

真菜の剣幕に、一ノ瀬さんは俯いてしまった。いつもの事ではあるが、真菜は自分の意見を言い過ぎる気がする。僕は流石に慣れたけど。

「真菜。一ノ瀬さんが困ってる」

「あ、…ごめん」

僕がそう言うと、真菜は我に返り、素直に謝罪した。…悪い奴じゃあ無いんだよね。

「そういや真菜。よく史条アリスを毛嫌いするけど、…何で？」

「…っ？！」

僕が前々から気になってた事を聞くと、真菜は何故か顔を赤くした。

……だから何で？

「そっ、そう言えば！山先遅いねっ！」

あ、今無理矢理話題を変えましたよ？この人。まぁ、深く追及するつもりも無かったから別に良いけど。

「ん～、そういや遅いね。何かあったのかな？」

丁度その時、ガラリと扉が開き山先が入ってきた。何やら汗を大量にかいている。

「す、すまん…。会議が長引いて、遅れて…。その…、皆…怒ってる…か？」

どんだけ気が弱いんだよ山先！生徒相手にそんなビビるなよ！

言葉にはしないが、皆そう思ってるに違いない。「怒ってないですよー」と、クラスの皆が口々に言う。それを聞いて、山先の顔に笑みが浮かんだ。

「そ、そうかっ。じゃあ、クラスの事っ、色々決めるぞっ！」

嬉々として黒板に文字を書き始める山先。あの人、本当に教員歴十年なのだろうか。にわかには信じがたい。

「ま、まず！クラス会長と副会長を決める、ぞっ！」

…驚くほど字が小さい。『会長』と書かれたと思われる字。次いで、その横に副と書かれる。

「えー、やりたい奴……、いる？」

山先は教室を見渡す。勿論生徒とは目を合わせない。これでよくクビにならないな、この人。

「いない～…のかぁ？」

誰も手を挙げないし、声も上げない。当然と言えば当然なのだが、ここまで静まり返るのも逆に凄いな。

クラスの全員が「誰かやれよ」と言いたげに顔を見合う。ただただ全員が、時間が経つのを待っている、はずだったのだが…。

「はぃ…、私で良ければ…」

僕を含めクラス全員の視線が、僕の隣の席に集まる。そこには、一ノ瀬さんが座っていた。

「や、やって…、くれる…のか…？」

「皆さんが賛成して下されば、…ですけど」

「良いんじゃない？」

皆が驚いて、声のした方を見る。声の主は真菜だ。真菜は明るい笑

みを浮かべ、一ノ瀬さんを見ていた。

「やりたい人がやれば良いんじゃない？こういうのは」

おぉ、真菜にしてはごもっともな意見。そして、その真菜の言葉をかわきりに、クラスの全員が口々に賛成の声を上げた。

そんな中、山先が心配そうに声を一ノ瀬さんに掛ける。

「い、良いのか？…まだ、転校初日…だろ？」

山先の言葉に、一ノ瀬さんは満面の笑みを浮かべながら。

「私は、色んな事をやってみたいんです。…この、柊高校で…」

そう言った。

一ノ瀬さんの言葉を聞き、山先は堅かった表情を崩した。…おぉ、今初めて山先が先生らしく見えた。今日はお赤飯だ。

「……よしっ」

何に気合いを入れたのかは不明だが、そんな声を出してから黒板に向かう山先。そして、黒板に。

会長・一ノ瀬　亜優

と、書き込まれた。

パチパチパチっと、クラス中から拍手が沸き起こる。一ノ瀬さんは恥ずかしそうに頬を掻く。

「じゃあ、…次は…」

「副会長はもう決定してるわよね！」

流れに乗って仕切ろうとした山先の言葉を、真菜が遮る。…山先、いと哀れ。

「真菜、もう決定してるって…何で？」

「……」

「……」

沈黙。そして、僕の顔を見てニンマリと笑う真菜。…嫌な予感がする。

「星、アンタやりなさいよ」

「……はい？」

思考がフリーズ。え、僕が副会長って…えぇっ？！

「な、何で…」

「アンタ、今このクラスで亜優と『一番仲が良い』じゃない」

「そ…、そんな事言ったらまた…、ヒィッ？！」

せっ、背中が痛い！今日何度も感じたこの痛み。それはまさしく…。

「そうだな、麻原が適任かもな（潰す）」

「ああ、『一番仲が良い』からな！（いつか見てろよ）」

皆、心の声がだだ漏れですよ？止めてくれませんかねぇ…そういうの、滅茶苦茶怖いんすよ？…いや、マジで止めてください、お願いします。

「麻原さん…、嫌だったら断っても構いませんよ？」

一ノ瀬さんが、若干潤んだ瞳を僕に向ける。あのですね、一ノ瀬さん？そんな風にされたら、余計に断れない物なんですよ…。

「…ヤリマス、ヤラセテイタダキマス…」

やるしかない。というか山先。僕が返事する前にもう書いてましたよね？

拍手が沸き起こり、男子が僕に声を掛けてきた。

「頑張れー！『短い』間だけどよろしくなー！」

「そうそう、『短い』間だけだぞー！」

「他意は無いけど、夜道には気を付けてなー！」

おい待て、最後の奴！夜道ってぇ？！…終わった。僕の人生はここで幕を下ろす。ごめんなさい、お母さん。僕は何一つ孝行を出来ませんでした。

「せんせー。アタシが書記をしまーす！」

僕が打ち拉がれているその時、真菜が手を挙げてそう言った。山先は言われるがままに『書記・天海　真菜』と記入する。

「えっと…、じゃあ、あとは…この三人に任せて、いい…よな？」

聞くな山先。

◇◆◇

その後、各種委員会の所属者を決め、何とか終了。でも、何で僕が一人で仕切る事になったんだろう…。

「凄かったです、麻原さん…」

「コイツ、実は中学時代に経験あるから。慣れてるのよ」

「あの時も、真菜が僕を推薦したんじゃないか…」

「？…そうだっけ？」

「……」

そんな会話をしながら、僕等は荷物を鞄に詰め込んでいた。始業式の日は学校が午前中で終了する。

「真菜はこれから部活？」

「うん、この学校の運動部に休みは皆無に等しいからね！」

そう言いながら、真菜は駆け出して行ってしまった。真菜はバスケ部に所属し、周囲からの信頼も厚い次期キャプテンだ。そんな所が、少しだけ羨ましかったりもする。

「ぉーぃ…」

真菜と入れ違いで、山先が教室に入ってきた。小さな声で僕と一ノ瀬さんを呼ぶ。面倒なので、もう山先に突っ込むのは止めにしよう。

「どうしました？先生」

「さっき、言い…忘れた事がぁ、った…んだ」

言い忘れた事？一体何だろう。僕と一ノ瀬さんは顔を見合わせる。山先はそんな僕等を見て、震えながら話を進めた。

「実は今日、…な。各クラスの、会長、副会長で…、会議がある…んだよ」

うちの学校は各学年ごとにクラスの代表で会議をする。学年生徒会ってやつだ。

「あれ？書記は良いんですか？」

一ノ瀬さんが首を傾げると、山先がビクッと肩を動かす。今気付いたけど、かなり息が荒い。

「すっ、すすすすまんっ！しょ、書記もだだったぁ！？」

「でも、真菜の奴部活に行きましたけど？」

僕がそう言うと、さらに動揺する山先。

「天海っ、には、先生から言っとくっから、君達でっ、先に行って
て？！」

そして、そう言い残して風のように去っていった。意外と足速いな、
山先。

「行きましょ？麻原さん」

「あ、うん」

何はともあれ、引き受けたからには仕事をちゃんとしないといけな
い。

「…あ」

「？…どうしました？」

「会議どこでやるか聞いてない」

だから、貴方も教員としての仕事はこなして下さい、お願いします
山先…

◇◆◇

「…遅いですよ？D組」

場所が分からず、結局他の先生に聞くことになった。そして、そこに着いた時には他のクラス会長、副会長書記は全員着席していた。入室して早々僕と一ノ瀬さんは、史条アリスに小言を言われてしまった。

「すみません…」

一ノ瀬さんが申し訳なさそうに頭を下げる。しかし、史条アリスはそれを見ることなく。

「早く着席して下さい。会議が始まりません」

そう言い、空いている席を指差した。…おぉ、真菜じゃないけど、今のはイラッと来ましたよ？

「はい…」

そう思いながらも、文句の一つも言えないヘタレな僕。…まぁ、波風立てるワケにもいかないしね。

「…、書記はどうしました？」

「……部活に」

史条アリスは僕の言葉に対し、不機嫌を隠す事なく溜め息を吐いた。…怖！この人怖！？

「書記の名前は？」

「天海真菜さん…です」

一ノ瀬さんが答えると、史条アリスは紙を取出し、そこに何かを書き記した。十中八九、真菜の名前が書かれてるんだろうな…。きっと、後で何か制裁が来るに違いない。

「…では、会議を始めましょう」

気持ちを切り替え、凛々しい表情を作る史条アリス。正直、見惚れてしまった。でも、明らかに僕とは別次元の存在。だから、好きとかそんな感情では無いと思うけど…。

「まず、各クラス会長の中から、学年代表を選抜したいと思います。立候補者は挙手して下さい」

言いながら手を挙げる史条アリス。…今のは珍しく滑稽に見えたぞ？

「では、私が代表を務めます。それで宜しいですね？」

全員が拍手。そして、ホワイトボードに、『史条アリス』と書き込まれた。

「では、副代表を副会長の中から選抜します。立候補者、挙手をお願いします」

沈黙。

まぁ、こうなりますわな。

「あのぉ…」

全員が僕の隣の人物を見た。一ノ瀬さんが小さく手を挙げている。…はいはい、もう先が読めましたよ…。

「D組会長、一ノ瀬さん。何でしょうか」

史条アリスの鋭い視線が、一ノ瀬さんの小さな身体を射抜く。「ひぅっ?!」と、妙な奇声を上げる一ノ瀬さん。数秒の間を置き、こう言った。

「あの、麻原さんを…推薦します…」

…ですよねー。何となく、そうなる気はしてたんだよ…、トホホ…。

「それでは、推薦理由を述べて下さい」

史条アリスは冷静に対応。流石生徒会長、進行の仕方が様になってるなぁ。…って、推薦されてるのは僕だった。

「えっと、クラスの生徒の所属委員会を決める時、麻原さん、凄く手際が良かったんです。…私、会長になったのに、何も出来なくて…」

薄々は気付いていたが、一ノ瀬さんは大勢の前で一人で話す事に慣れてない。それなのに、今必死に話している一ノ瀬さんは、素直に凄いと感じた。

「…成る程」

思案顔の史条アリス。そして品定めをするように、僕をじっと見てきた。青い瞳が僕を捉える。身体が竦み、強張っていくのが分かる。こんな視線を浴びながら話した一ノ瀬さんは、やはり凄い。

「麻原星さん、貴方はどうしますか？」

史条アリスがそう言葉を投げ掛けてきた。僕は隣の一ノ瀬さんを見る。一ノ瀬さんも僕を見ており、自然と視線がぶつかる。

「ここまで言われたら、やるしかないでしょ…」

副会長といい、この副代表といい、今日は済し崩しで物事が進んでしまっているような気がする。嫌なら嫌と、しっかり断った方が良いのだろうか。…まぁ、今回はさほど嫌ではないし、まぁいっか。

「…では、他に立候補する人はいませんね？…よって、麻原星に副代表を務めて頂きます」

ホワイトボードに書き込まれる、『副代表・麻原　星』の文字。…少し偉くなった気がした。…はい、気がしただけです。別に調子乗ってません、本当です。

◇◆◇

その後書記を決め、二年前期の行事を確認し、今回は終了となった。

「では、以上で第一回学年会議を終了します。起立、礼」

「ありがとうございましたー！」

時刻は午後一時。会議の予定など無かったため、弁当なんて持ってきてない。一ノ瀬さんも同様。「お疲れさま」と声を掛け合いながら、二人で退出しようとした。その時。

「麻原星、貴方は残って仕事をお願いします」

耳に心地好いハスキーボイスが僕を呼び止めた。振り返った視線の先に居たのは、言うまでもなく史条アリス。

「あの…、僕今日、弁当無いんだけど…」

「そうですか、それは大変ですね」

ピシャリ。そう言い切られた。どうやら、仕事をしていく他に選択肢は無いらしい。一ノ瀬さんにそう言って、一人で帰ってもらう事にした。…うぅ、お腹すいたよ、お母様…。

溜め息を吐きながら、席に座る。書記は残っていないようで、室内には僕と、史条アリスだけだ。…ぐあぁ、息苦しぃ…。ヤバいヤバい、酸欠になる。

「なに、手早く取り掛かればすぐに終わります」

書類に視線を落としながらそう言う史条アリス。

「さいですか…」

僕も仕方なく書類に目を通した。

仕事内容は書類整理。物を整理する事に関しては僕の得意分野だ。生徒の名簿やら何やらを纏めていく。

「あ、結構早く終わりそう…」

そう僕が呟くと、史条アリスはチラリとこちらを見てきた。その目は、「最初からそう言ってるでしょう、能無しが」と言っているように見えた。一々怖いなぁ…。

手が止まると、また小言を言われそうなのでドンドン進む。十数分後、仕事が完了した。

「つ・か・れ・たぁ～」

「はい、お疲れ様でした」

一気にやったので疲労が半端ない。伸びをして関節を鳴らす僕に対し、史条アリスは依然背筋をピンと伸ばし、書類の確認をしている。…超人ですか？この方。

でも、そんな事を面と向かって言えない悲しい僕。

「『今回は』麻原星が手伝って下さったお陰で早く終わりました。ありがとうございました」

ん？今、ありきたりな謝辞の中に気になるワードが…。

「『今回は』って、もしかして今まで一人でやってたの？」

あくまで視線を合わせることなく、史条アリスは頷く。

「嫌な仕事を、無理矢理に押し付ける訳にはいきませんから…」

いや、僕に対しては有無を言わさぬって感じだったけど？…言葉にはしない、何故なら怖いから。

「…麻原星」

「へ？」

急に声を掛けられ、間の抜けた声を出してしまった。見ると、史条アリスが僕の事を見ていた。視線がぶつかり、反射的に逸らしてしまう。

「…何？」

「部活にも参加せず、かと言って勉学に精を出している訳でも無い様ですが…」

「…何、お説教？」

この場でその事を指摘されるとは思ってもみなかった。無意識のうちに苛立ちが出てしまったらしい。僕自身も驚く程に感情の無い返事だった。

「いえ、違います。気を悪くされたなら謝罪します」

しかし、史条アリスは怯む様子が全くない。肝が座ってるね、流石に。

「いや、いいよ。別に…。でも、どうしたの？急に…」
史条アリスにそう尋ねると、彼女は数秒思案した後に答えた。
「…貴方と同じ中学校を卒業した生徒から、貴方が過去、生徒会長を務めていたと聞きましたので」
「…」
う～ん…、要するにアレですか？「そんな人間が、何故今はこんなにも成績が悪いのか」、とでも言いたいのかなぁ…。
「確かにやってたけど、それと成績は関係なくない？」
「いえ、成績の事を言っているのではありません」
あれ？違った？
「…この話はまた今度にしましょう」
そう言って、史条アリスは書類を片付け始めた。…何だろう、気になるなぁ。
◇◆◇
「…げ」
込み合う時間から若干ずれた食堂。僕は力なくそこに立ち、そんな声を発していた。

食堂入り口にあるレジ。その左隣に惣菜パンが並んでいるはず、なのだが…。

「ない…、売り…切れ？」

いや、そう気を落とす事もない。家に帰れば余り物が何かあるはずだし、何より金を使うことは正直よろしくない。だが…

ぐうぅ〜〜〜〜〜っ……

空腹が思考を遮断。腹が、「何かぁ…、何か食い物おぉっッ？！」と叫んでいる。…そういや、今朝は朝食抜きだったような…。

「ごめんねぇ、野村って男の子が、『ヤケ喰いだぁっ』とか言いながら全部買ってっちゃってねぇ」

食堂のオバチャンが申し訳なさそうに、頬に手を当てる。の、野村くん…。まさかそんな攻撃をしてくるなんて…。

「…ここまでかっ」

ガクッと膝が折れる。力が入らず、立ち上がれない。普通のメニューだって、営業時間が過ぎたために注文出来ない。コンビニは割高だし……。と、こんな事をずっと考えている。

「……何をしているのですか？麻原星…」

後ろを振り返ると、そこに立っていたのは我らが生徒会長。変な物を見るような目をして、口の端は引きつっている。あら、面白い顔。

手には…、史条アリスには似付かわしくない、可愛らしい『お弁当』。

◇◆◇

「…ごめん、弁当食べちゃって」

「…構いませんよ、私が仕事に付き合わせたのが悪いのですから」

そう言いながら、史条アリスは参考書に視線を落としている。小難しい数式やら何やらが並んでいる。…ん？

「あの史条アリスも、イージーミスするんだな」

「？」

眉をひそめる史条アリス。僕を見、「何を言っているのですか？」と、その瞳は語っているように見える訳で…。いや、怯むな僕、今回僕は間違ってない…はず。

「えっと…、この問3。その…、代入する数字を間違って…るよね？」

ごめんなさい山先。人に指摘するのって、何か勇気が必要なのですね。

「…」

じっと参考書を睨め付けて、やがて溜め息を吐き、ペンを走らせる。そして僕を見て。

「ありがとうございます。…今日は麻原星に助けられてばかりですね」

……小さくだが、微笑んだ。

「あ、いや、偶然だよ！偶然！」

想像もしていなかったので、恥ずかしいぐらいに狼狽えてしまった。やっぱ美人なだけあって、笑顔が良く似合う。ただ、『笑う』という印象が無かったので、それは見事な不意打ちだった。

「ふふふっ」

そんな僕が可笑しかったのか、史条アリスは笑い続ける。僕はポカンと口を開いてしまう。数秒の間を置き、僕は我に返った。

「史条アリスって、笑うんだな…」

ピタリと、空気が固まる。史条アリスの表情も笑顔で固定。…へ？地雷？

「貴方は、私の事を何だと思っているのですか？」

笑顔のまま、そう尋ねてきた。余計に怖いよ…。

「えっとぉ…」

「二三、質問しますが、宜しいですか？」

「…はぃ」

◇◆◇

その後、こってりと質問責め。放たれる言葉の弾丸は、僕の心に延々とダメージを与える。その話が終わる頃には精神力が尽き、僕は食堂の机に突っ伏してしまった。

「…ごめんなさい、本当にごめんなさい」

「反省しているなら良いでしょう」

ふんと鼻を鳴らし、そっぽを向く史条アリス。

「…、何か不思議…」

顔を上げ、史条アリスの表情を見た時、無意識のうちに僕はそう呟いていた。史条アリスは横目で僕の事を見ている。

「…不思議、とは？」

「いや、雲の上の存在だと思っていた史条アリスの弁当食べたり、普通に会話してるからさ…」

「……」

じっと、僕の目を見る。…いや、睨むと言った方が近いのかな？…とにかく、何やら考える様子で、史条アリスは僕を見てきた。数秒見て、今度は自分の顎に手を当て、史条アリスは深く考えだす。

「…あ、あの～」

「…」

え、無反応？！

会長様は相当深く思案しておられる御様子で、その間僕は窓の外の風景を眺めてみたりするのです。…あぁ、桜に蕾が付いてる。満開はいつ頃だろうなぁ…。

「…分かりました」

「ほぇ？」

いきなり史条アリスが呟くので、間の抜けた返答しか出来ない。

「…ど、どうしたの？史条アリス…」

「それです」

ビシッと、鼻っ面を指で指された。『それ』とは一体何だろう。

「呼び名です。互いにフルネームで呼びあうから距離が生まれるのです」

何を考えているのかと思えば、僕がさっき言った事の解決法を考え

ていたらしい。真面目というか何というか…。まぁ、そこが史条アリスの美点だったりするのだろうけど…。

「そんなに必死に考えなくても…」

「いえ、代表と副代表。連携がしっかりと取れていないと、仕事に支障が出てしまいます」

「…さいですか」

まぁ、妥当な理由だなと思う。確かに、こうも他人行儀では仕事もやりにくい。現に、先程二人で仕事をしたが、息苦しくて仕方なかった。多少でもそれが解決出来るなら、それに越したことはない。

「ん、じゃあ何て呼ぶ？」

「…では、私は麻原と」

「…『くん』とかは付かないの？」

「？…いりますか？」

「いや、いいよ…」

何か、会社で上司から呼ばれるみたいで嫌だな。…同級生なのに。

でも、ここで無理に要求したらあっちが困るだろうから、それで良いか。

「じゃあ、僕は史条『さん』で」

わざと『さん』を大きくして言ってみる。しかし、相手はそれを全く気にしていないようだった。

「では、これで決まりですね。…これから、宜しくお願いします」

「あ…、こちらこそ」

互いに頭を下げあう。このギクシャクした感じが無くなる日が、いつか訪れるのだろうか。…ん～、来るとしても百年後ぐらいかな？

『史条さん』は時計を見、弁当箱を持って立ち上がった。

「私はこれから水泳部の活動がありますので、失礼します」

頭を下げ、去っていく『史条さん』。やがて、その後ろ姿は見えなくなった。

「『史条さん』…か」

雲の上の存在だと思っていた史条アリス。その人物とここまで会話をすることになるなど、予想もしていなかった。

転校生の一ノ瀬さんといい、史条さんといい…、今日はたくさんの事が起こり過ぎる。…何か、まだありそうな気がするぞ？…勘だけど。

「…さて、お腹も膨れたし、早く帰って『一仕事』しますかっ」

勢い良く立ち上がる。生活費の確保は大切な事。…母さんだけにやらせる訳にはいかないからね。

僕は駆け足で帰路についた…。

第二話～史条アリス～（後書き）

読まれた方、感想をお聞かせ下さい。m（＿）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1810l/

私立柊高校の日々。

2010年10月28日01時04分発行